

サンディエゴ計画の終焉

南テキサスでは、誰にも罰せられる事のないレンジャースの横暴な行為が、「モリン事件」としてウイルソン大統領を巻き込んだ歴史的な大事件に発展した。1916年4月の終、折から5月の初めにかけて、メキシコ人ホセ・モリンはJ.M.レアルの偽名でサンアントニオから国境までのテハノやメキシコ人を組織しようと奔走していた。以前ビヤ派として戦闘経験があった彼はデ・ラ・ロッサの従弟から勧誘されて陰謀を企画し、5月10日を実行日とし、同志を募っていた。一度実行部隊を組織したら、サンアントニオ周辺の鉄道と通信回線を切断し、町に火を放つ、続いてブラウズヴィル、ミッション、キングスヴィルでも同じ事を実行するつもりであった。モリンは1914年、カランサ軍ジェネラルになったことを後で認めた。不覚にも仲間の一人、サルバドール・セルバンテス大佐が米国捜査局への通報者であったことから、彼の陰謀が明るみに出た。セルバンテスの通報以外に、スペシャル・レンジャー・ハンソンとキング農園主シーザー・クレバークも既に情報を掴んでいた。106

5月10日、モリンはキングスヴィルでパン屋を営む、元兵士ビクトリアノ・ボンセを訪ねるため夜行列車に乗った。セルバンテスが駅まで送りに来ていた。ハンソンと捜査局の秘密情報員ハワード・ライトも同乗していた。モリンはキングスヴィル駅から降りる直前、二人に逮捕された。ライトはモリンをキングスヴィルの刑務所に入れる手配をし、保安官にボンセの逮捕を依頼した。二人はもちろん容疑を否認したが、警察側は二人から証拠書類を押収していた。数度にわたる尋問で一部罪状を認めた二人をキングスヴィルの刑務所に残したまま、ライトは連邦大陪審への報告書を作成するためにサンアントニオに帰った。その間キングスヴィルの保安官はメキシコ人関係者十七人を拘束し、留置所は溢れかえった。

5月24日、サンアントニオ・エクスプレス紙がモリンの写真入で、モリンとボンセの死を報じた。秘密情報員ライトは驚いて真偽を確かめるため、キングスヴィルの保安官スカーボロウに電話を入れた。モリンは殺人容疑、ボンセは1915年のブラウズヴィル列車襲撃事件に加わったとして、ウィラシー郡保安官が身柄確認のために二人を引き取ったことが判明した。次に電話したウィラシー郡保安官クリント・アトゥキンスは単に、ブラウズヴィルへ送るためにレンジャーに渡した、レンジャーの名前は知らない、と言った。ブラウズヴィル捜査局の秘密情報員は八方手を尽くしてモリンとボンセを探し回ったが、何一つ情報は得られなかった。107

ウィラシー郡保安官アトゥキンスはモリンとボンセを町の外へ連れ出すと、キャプテン・JJサンダースのレンジャースA部隊に二人を引き渡した。捜査局から電報で問い質されたキャプテン・サンダースはモリンとボンセが殺された事は知らないし、何処にいるかも知らない、と回答した。ライトはテキサス・レンジャース副官ハッチンスに釈明を求めたが、一月待っても回答を得られないため、オースティンの本部へ出向いて、サンダー

スからの報告書を読んだ。それによると、5月22日、ウィラシー郡保安官ブルックスの許可を得て、サンダースとレンジャー・モスレーの三人で、モリンとボンセを連れて、検証のためにノリアスに向かった。そこからブルックスとモスレーは二人を車に乗せて、レイモンドヴィルへ向かった。その途中、検証している間に二人は突然走って藪の中に逃げ込んだ。辺りは暗かったため二人を見つけることが出来なかった、とブルックスとモスレーから報告を受けた。翌日皆で手分けして探したが行方は分からなかった、と報告書は結ばれていた。108

ラレドのスペイン語新聞はレンジャースの暴挙をトップで報じ、リオグランデ・ヴァレーのテハノは懸命に抗議した。キングスヴィルではフェノン・モライダ牧師が教区民の嘆願書を携えて巡回裁判所判事ウェスレー・ホックに、大統領へ手紙を書くよう訴えた。ホックはそれを認め、訴えを英訳してウイルソン大統領へ送付した。モリンとボンセは、他の多くの者と同じように、メキシコ人であるが故に、無実でありながら裁判にもかけられず殺されたと訴え、この国の法の下で当然受けられるべき保護を求めた。

前年の暮れ、南テキサスでメキシコ系住民が法律執行官により虐待を受けていたことを具に報告を受けていた大統領は、法務省に調査を命じた。報告を受けると、大統領は連邦司法長官に、このような問題が引続き発生しないよう、テキサス政府と十分に打ち合わせをするよう申し付けると同時に、ホック判事に感謝の意を伝えた。更に大統領は内密で、法務省と司法省へ、囚人をテキサスレンジャーへ引き渡すことを禁じた。これで事は収まらなかった。ホック判事が大統領に申し立てをしたことを知ったキャプテン・サンダースは激怒した。彼は数ヶ月間塞ぎこんでいたが、ある朝ファリュフリアスの裁判所の中にある判事室に押しかけた。サンダースはホック判事に散々悪態をついてから、お前が大統領に書いたのか、と判事に詰め寄った。判事が肯定すると、いきなりピストルを抜いて判事の頭を殴った。判事が武器を持っていたら殺されていた。サンダースは判事が無防備なのを知ると、ブツブツつぶやきながら出て行った。古参のレンジャー・キャプテンが判事室でアングロの判事を襲って罰せられない状況下で、当時のメキシコ人やテハノが受けた仕打ちが、どのようなものであったかは容易に想像できる。109

7月初旬、PSD襲撃再開の僅か二週間後、南テキサスの国境はすっかり平静を取り戻し、侵入してくる武装集団も見られず、攻撃もなく、アングロ住民の不安も徐々に解消しつつあった。デ・ラ・ロッサとピサニャはウエップ・ステーションとサンイグナチオでの屈辱的な失敗で、落胆して身を引き、デ・ラ・ロッサの一団は解散した。次の週、リカウトは更に数人の叛乱者を逮捕したことをブラウズヴィル防衛隊長に報告した。こうしてPSDは終焉した。110

当時テキサス州議会ではただ一人メキシコ系議員であったホセ・トーマス・カナレスは1877年にブラウズヴィルで生まれた。父親は裕福な農場主であった。盗賊戦争が収まり数年経った1919年のはじめ、カナレスは何の罪もない多くのメキシコ人を、メキシ

コ人であることだけが理由で殺害した残忍なテキサス・レンジャースを糾弾し、テキサス・レンジャースに関する法律改革案を議会に提出した。彼はその聴聞会でレンジャースが犯した非道の数々を取り上げ、死の脅迫を受けながら改革を迫った。その中で取り交わされたやり取りの中に次のようなものがある。「ところで、カナレス議員、あなたの血統はメキシコ人ですね、違いますか」「私はメキシコ人ではありません。私はアメリカ市民です」「血統は?」「エー、あなたがそう云うならばそうです、しかし私はテキサス・メキシカンです」

法案は小差ではあったが否決された。南テキサスに配属されていたレンジャースたちは小躍りして喜んだ。カナレスは深く傷つき、間もなく政治から退いて弁護士となりその後、虐げられたテハノやメキシコ人を支えた。レンジャースの残虐行為を克明に記したテキサス州議会カナレス法案審議々事録は印刷されることなく直ちに機密文書となり、1970年代まで公開されなかった。しかも事件当時は州政府が厳しく報道管制を布いていたため、この盗賊戦争は長い間忘れられていたのである。¹¹¹

1848年2月2日、アメリカの侵略戦争後締結されたグアダルルーペ・イダルゴ条約により新たに合意された国境線以北に住むメキシコ人をテハノと呼んだ。テハノの多くは国家という概念が希薄で、彼らは漠然とメキシコとアメリカの二つの国に属していると思っていた。テハノが自らをアメリカ市民であると自覚する契機となったのがサンディエゴ計画による盗賊戦争であったと言われている。

106. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1904", University of Oklahoma Press, 1992, P160
107. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P304
108. Ibid. P306
109. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1903", University of Oklahoma Press, 1992, P161
110. Benjamin Heber Johnson, "Revolution in Texas, How a Forgotten Rebellion and its Bloody Suppression Turned Mexicans into Americans", Yale University Press, 2003, P143
111. Ibid. P175